令和八年度入学試験問題（前期日程）

国　語

初等教育教員養成課程　人文・社会教育プログラム　（国語系科目）
中等教育教員養成課程　中等教育プログラム　国語専攻

注意事項

一　解答はすべて別紙解答紙の指定の箇所に記入すること。
二　解答紙には、必ず受験番号を記入すること。

解答するにあたっては、次のことに注意せよ。

ア　送り仮名・仮名遣い・文字・記号の表記については、標準的慣用表記によること。

イ　句読点は一字に数える。

ウ　楷書で書くこと。

〔一〕次のそれぞれの問いに答えよ。

問一　①～⑩のカタカナの部分は漢字で、漢字の部分は読みをひらがなで記せ。

①　幹部がワイロを受け取ったようだ。　②　学問をショウレイする。　③　落語を聞きにヨセに行ってきた。

④　業界とのユチャクが疑われる。　⑤　仕事が多くてヒヘイしている。　⑥　彼女は朗らかに笑った。

⑦　春の息吹を感じるようになった。　⑧　寺から読経の声が聞こえる。　⑨　袖口が綻びている。

⑩　今年のチームは猛者がそろっている。

問二　①～③の漢字の熟語と同じ構造（上の漢字と下の漢字の関係）の熟語を、次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

①　読書　②　父母　③　日没

ア　天地　イ　地震　ウ　自若　エ　身体　オ　抜群　カ　生得　キ　遠路

問三　空欄に適切な漢字を補って、四字熟語を完成させよ。

①絶□絶命　②東□西走　③荒唐無□

問四　空欄に適切な漢字を補って、慣用句・ことわざを完成させよ。

①金の切れ目が□の切れ目。　②人の口に□は立てられない。

③さわらぬ□にたたりなし。

問五　次の和歌を読んで、以下の①②の問いに答えよ。

題しらず　読人しらず

山高み　人もすさめぬ　桜花　いたくなわび　A　我見はやさむ

又は、「里遠み　人もすさめぬ　山ざくら」

①　初句「山高み」の現代語訳としてふさわしいものを、次の選択肢から選び、記号で答えよ。

ア　山が高くみえて　イ　山が高くなく　ウ　山が高いので　エ　山は高く美しく　オ　高い山が

②　空欄 A に入る終助詞にふさわしいものを、次の選択肢から選び、記号で答えよ。

ア　か　イ　で　ウ　て　エ　ぞ　オ　そ

問六　次の漢文の傍線部を書き下し文にせよ。

①　未レ知レ生、焉知レ死。

②　青取二之於藍一、而青二於藍一。

問七　次の選択肢の作品もしくは作者を、古い順から新しい順に正しく並べて、記号で答えよ。

①　ア　三宝絵詞　　イ　古事記　　ウ　栄花物語　　エ　平家物語

②　ア　仮名垣魯文　　イ　三島由紀夫　　ウ　芥川龍之介　　エ　井原西鶴

③　ア　古今和歌集　　イ　万葉集　　ウ　拾遺和歌集　　エ　後撰和歌集

④　ア　三国志　　イ　孟子　　ウ　阿Q正伝　　エ　史記

⑤　ア　蘇軾　　イ　陶淵明　　ウ　李白　　エ　白居易

〔二〕次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

こころとは人類学的には脳のはたらきである。それは、脳と身体の神経生理学的反応に基づく記憶、感情、思考などを含み、生物学的進化の対象であり主体となる。この定義に基づけば、こころは人類の起源よりはるか以前の、およそ高度な神経系を持つに至った動物にまで遡ることができる。

また、母子間におけるいわゆる利他的行動は、霊長類はもとより昆虫や鳥に至るまで子育てをする生物に広く見られる。この意味では、こころの起源は子育てをする生物、さらには雌雄分化した生物にまで遡ることができる。あるいは、こころの定義を最大限にとり、主体的な生命維持のための自他識別、恒常性、自己複製等の能力までを含めるならば、こころのはたらきは生命活動そのものであり、Aこころの起源は生命の起源と同一視されるかもしれない。

もっとも、仏教では、慈悲の実践のために母の愛とその恩を出発点として、そのこころを衆生にまで拡大させるという瞑想（めいそう）や教育が行われる。これは、母の子に対する利他的行動は、一般的な利他的行動というよりも、生物の生存のための母子間に限定される本能行動であることを示している。人間としてのこころは、本能的なこころのはたらきそのものではなく、それに源を発しながらも一般化し、制御し、自覚的なはたらきとしたものだ。したがって、このこころこそが人間としてのこころの起源であり、人間性の起源となる。本当は、わたしたちは人間としてのこころの起源までにさえ到達していないのかもしれない。

アフリカで七〇〇万年前に誕生した人類は、それぞれの地域に適応しながら地球上に拡散し、様々な生活や社会や文化を作りあげ今日に至る。社会は、狩猟採集民に見られる平等的社会から、序列化・階層化社会、さらには王国という複雑社会まで展開した。また、自然を神とし対等な関係を作ってきた人類は、自らが作りだした高位の神により、自らを、神、人間、自然という垂直的支配と従属の関係の中に位置づけた。

人間のこころは、このような人類の進化の過程における生態と社会に結びつき、そこで生まれてきた。Bいうこころのはたらきは人類に広く見られ、進化の過程を通して継続してきた。初原的同一性とは、カナダの先住民に見られるように、人間と動物とは異なるものであるが本来的に同一であるとする思考である。より一般的には、併存する二元性と同一性と

の間の矛盾を解消しようとする説明原理だといえる。自然の中で自然とともに暮らす人びとは、人間も自然もその本質においては一つであると生活の中で日々体験している。したがって、これは宗教以前の宗教であり、人間の内なる自然がそのまま反映されたものなので、自然的宇宙観と呼ぶことができるかもしれない。

互恵性とは交換を通して形成される社会関係である。人間の認識する社会には、人間社会と自然の人格化による超自然的社会との二つがある。狩猟の論理は、初原的同一性の思考に基づき自然を人格化し、人間と超自然との関係を贈与と返礼による互恵性として認識する。さらに、人間社会では、交換と再分配を通して互恵性が形成され、個人と集団の生存を可能とする。互恵性の形成には、利他心や利己心というこころの社会性の意識的、無意識的な発動が関わっている。また、互恵性が恒常性を持ち、全体として一つの体系が形成されている状態が共生である。

この狩猟の論理は、狩猟活動と強く結びついているため、その起源は少なくとも二〇万年から三〇万年前の現生人類の直系の祖先であるホモ・サピエンスにまで遡ることができる。あるいは、狩猟採集民に見られるわかちあいのこころは、大型動物の狩猟活動が始まり食料の分配が行われた一九〇万年前のホモ・エレクトス（注1）にまで遡ることができるかもしれない。また、互恵的協力行動の進化の条件はチンパンジーなど人以外の霊長類によっても満たされていることから、互恵性は七〇〇万年前の初期人類にまで遡り得る。ここでは協力と競争を通したマキャベリ的知性（注2）の進化が始まっていたのだろう。

さらに、一七五万年前のジョージアのドマニシ遺跡で発見された歯のない初期ホモ属（注3）が生きていたこと、六万五〇〇〇年前から三万五〇〇〇年前のイラク、シャニダール洞窟で左眼窩（がんか）を粉砕骨折し腕と脚が不自由なネアンデルタール人（注4）が生き延びていたこと、埋葬されたネアンデルタール人などから、C彼らの他者へのおもいやりのこころを想定することもできる。

また、七万五〇〇〇年前の南アフリカのブロンボス洞窟で発見された貝殻製首飾りや模様の刻まれた赤色顔料の塊、七万年前のタンザニア、ロイヤンガラニ川流域から出土したダチョウの卵殻製ビーズ、六万年前の南アフリカ、ディープクルーフから出土した彫刻の施されたダチョウの卵殻の欠片から、当時のホモ・サピエンスの表象能力を持つこころのはたらきを知ることができる。

さらには、六万四八〇〇年前のスペイン、ラパシエガ洞窟からはネアンデルタール人による世界最古とされる壁画がみつかって

いる。もっとも、これらのこころのはたらきがはっきりと表現されるのは、ホモ・サピエンスが出現し、言語と世界観が飛躍的に発達した一万年から四万年前の後期旧石器時代における洞窟壁画においてである。

したがって、初原的同一性と互恵性の認識は、現在、地球上に生きる私たち現生人類において普遍的に見られる。北方狩猟採集民においては、動物と人間との結びつきが強いため、これらは動物を中心に展開、強調され、熊祭り（注5）という祭礼を作りあげた。遊牧社会においても、カムチャツカのトナカイ遊牧民に見られるように、儀礼を通して自然のサイクルの中に自己を同一化させ、神々との間で新たな互恵的関係を作った。また、モンゴルのシャマン（注6）は祖先の霊を憑依（ひょうい）し、神話的時空間における初原的同一性の場への回帰と、混沌（こんとん）から秩序への回復により、そこで獲得した力を治療に用いる。

I 、西チベット、ラダックのシャマンは神々と同一化し、人びとに託宣を告げ、治療を行う。ウパニシャッド（注7）の思想では自己と宇宙とを同一化し、また、仏教の瞑想で空を体得する修行僧は、すべての現象に関する固有の存在や自我の否定という本源的な真理に同一化し、そこから生きとし生けるすべてのものに慈悲を与えるという利他心を実践する。

すなわち、二元性と同時に同一性も人間に普遍的なこころであり、これを自覚し統合する論理が初原的同一性である。人間性の起源は初原的同一性にある。そこから、自己と他者とは異なるものではなく本来同じなのだということ、したがって、その関係は対立ではなく互恵的なのだというこころのはたらきが生まれる。他者へのおもいやりや生命に対するいつくしみの感情は、この人間性に深く根ざしている。このこころのはたらきの根源は、自他の区別を超えたこころの自然である。

実際、カナダの先住民に見られるわかちあいのこころ、アイヌの熊祭りに見られる共生とおもいやりのこころ、トナカイ遊牧民の循環と平等原理のこころ、モンゴル・シャマンの人びとの願いに応えるこころ、ラダックの仏教僧院の祭礼に見られる慈悲のこころは、すべて他者をおもいやる利他心であり、初原的同一性の感覚に源を発する。

こころはD人類進化における社会の展開に伴う新たな課題に対処して、様々な文化装置を作り出すことで個人と社会の存続をはかってきた。狩猟採集民のキャンプでの獲物の分配、アイヌの熊祭りにおける序列化と平等原理の併存した分配方法、コリヤーク（注8）社会における富の偏在に対処するためのトナカイ橇（そり）レースによる再分配のシステム、モンゴルのシャマンの成巫（せいふ）過程（注9）

と社会的役割、ラダック仏教僧院の生態と祭礼を通した僧と村人との共生関係は、このこころの発動のための様々な文化装置だ。さらに、チベットの仏教儀礼では、瞑想を通してこころを自然の原点に回帰させ、そこから究極の利他心を動作させることで、自他のしあわせとともに平和構築を実現しようとするこころの自己制御が見られる。

こころの自然の中で、いつくしみとしあわせが生み出されている。このこころのはたらきを、宗教は個人や家族の範囲を越えて、地域社会、国家、人類全体、さらには地球上の生きとし生けるものすべてにまで広げようというのである。

人間は言語を活用し、自然との関係を認識し、それにより文化を発展させ、地球上への適応放散を果たしてきた。しかし、別の視点から見れば、人間は自己を正当化し、虚構の論理的世界を構築し、これが人類を他の生物にとって、もっともやっかいな存在にしたともいえる。地球上に拡散した人類は文明を作り、環境を破壊し、さらに正義であるとの正当化のもとに同じ人類を殺戮(さつりく)してきた。その結果、人類は人類自身にとってさえ、もっとも危険な存在になった。現代の地球環境問題も紛争もこの延長線上にある。

もし、そうならば、人類の進化は、適応という観点からは本当は不適応ということになるかもしれない。人類の進化は生物界全体から見ると、ヒト科の脳容量の増加による定向進化（注１０）であり、人間と自然との乖離(かいり)と、自己中心的な一方向への特殊化の過程でしかないとも考えられる。人類の将来についての最悪のシナリオは、人類が他の生物をも道づれにして絶滅するというものだろう。そもそも、生物の進化は人類も含め絶滅と新しい種の適応放散のくり返しだった。

Ⅱ　、このような状況のもとで、人類についての最良のシナリオをもし挙げるなら、人間はもう一度、人類進化史におけるこころと人間性の起源という根源的事実を知り、こころの自然にまで遡り、そこから長期的展望に立って人類の未来を照射し、それを実現するためのこころの制御を行うことである。こころは人類進化においてそうであったように、適応の産物であると同時に行動の内なる主体となるからである。

（煎本孝『こころの人類学―人間性の起源を探る』筑摩新書、二〇一九、から引用した。ただし、一部表現を改変した箇所がある）

(注1)ホモ・エレクトス…ヒト属進化の最初の段階である原人類のこと。完全な直立歩行をし、火を使用した。言語も使ったと考えられている。

(注2)マキャベリ的知性…霊長類学においては、動物、特に霊長類が複雑な社会の中で巧みに立ち回り、自己の利益を最大化しようとする知性のこと。

(注3)ホモ属…ホモ・エレクトスなどの原人、ネアンデルタール人などの旧人、そして現生人類のホモ・サピエンスが属する生物属のこと。

(注4)ネアンデルタール人…約四〇万年前から二万数千年前まで生存した旧人のこと。ヨーロッパから西アジアにかけて分布した。

(注5)熊祭り…捕獲した熊の霊を神々の国にいる父母のもとに送るとされる宗教儀礼のこと。

(注6)シャマン…意識変容状態で託宣などを行う宗教的職能者のこと。

(注7)ウパニシャッド…古代インドの哲学文献のこと。最古のものは紀元前六世紀頃成立した。

(注8)コリヤーク…ロシア・シベリア東部の先住民族のこと。狩猟採集を生業としていた。

(注9)成巫過程…シャマンとなる過程のこと。

(注10)定向進化…生物が内的要因により一定方向に進化するとする、テオドール・アイマー(一八四三～一八九八)らの唱えた進化説のこと。ジョージ・シンプソン(一九〇二～一九八四)は、アイマーの主張した「内的要因」を否定して自然淘汰によって説明できるとしたが、今日でも一定方向の進化傾向が見られる場合についても、そのように言われることがある。

問一　空欄Ⅰ・Ⅱに入る表現として最も適当なものを、次の選択肢の内からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

①　しかも
②　同様に
③　それにもかかわらず
④　つまり

問二　傍線部A「こころの起源は生命の起源と同一視されるかもしれない」と判断できる理由について、適切ではないものを次の選択肢の内から一つ選び、記号で答えよ。

①　こころのはたらきは、人類の起源よりはるか以前の、生物学的進化を経て高度な神経系を持つに至った動物にまで遡ることができるから。
②　こころのはたらきは、主体的な生命維持のための自他識別、恒常性、自己複製等の能力などの生命活動まで含むことができるから。
③　こころのはたらきは、利他的行動を持つ霊長類はもとより子育てをする生物、雌雄分化した生物にまで遡ることができるから。
④　こころのはたらきについて、仏教においては母の子に対する愛を慈悲の実践のために衆生にまで拡大させる利他的行動として行われるから。

問三　傍線部B「初原的同一性と互恵性というこころのはたらき」とは、どのようなことを指すか。本文中の言葉を用いながら一〇〇字以内で説明せよ。

問四　傍線部C「彼らの他者へのおもいやりのこころを想定することもできる」と筆者は述べているが、それはなぜか。本文中に示された例を用いながら一〇〇字以内で説明せよ。

問五　傍線部D「人類進化における社会の展開に伴う新たな課題」を解決しなかった際に起こりうることの具体例として筆者が挙げるものを、「ということ」に続く形で本文中より十九字で抜き出して答えよ。

問六　本文の内容や表現の特徴についての説明として、適当なものを次の選択肢の内から二つ選び、記号で答えよ。

① 人間と自然とを同一視する自然的宇宙観によって矛盾が生じ、人間のこころを明らかにする障害になってしまっていると述べている。

② 人間のこころの独自性について、わかちあいやおもいやりといった互恵性の観点から、さまざまな文化や社会の具体例を通して説明している。

③ こころの自己制御を行うために、人類は儀式などの文化的装置を作り出してきたが、言語はその装置が機能するための一翼を担うことができないことを述べている。

④ 様々な地域の文化の実例を示すことによって人間のこころの起源について探るとともに、人間とそれ以外の生物の共通点を挙げることで、人間のこころの特異性を示している。

⑤ 文章の冒頭・末尾において人間のこころの起源についての独自の主張がなされており、従来の見解に対する筆者の批判的考察がなされている。

⑥ 考察した見解の後に根拠となる具体例が述べられており、人間のこころの起源についての筆者の主張を裏づけるような記述がなされている。

〔三〕 次の文章は、『大鏡』で、藤原隆家を語るくだりである。読んで、あとの問いに答えよ。

御目のそこなはれたまひにしこそ、いといと a あたらしかりしか。暗かりけるに、入りたまひけるに、A 几帳の手に突きたまへるとぞ一家にはのたまふめる。よろづにつくろはせたまひしかど、えやませたまはで、御まじらひ絶えたまへる頃、大弐の闕、出できて、人々望み b ののしりしに、「唐人の目つくろふが 1 あなるに、見せむ」と思して、「こころみにならばや」と A 申したまうければ、三条院の御時にて、またいとほしくや思し召しけむ、二言となくならせたまひてしぞかし。

さて下りたまひしよりはじめて、いと猛なりきかし。筑紫におはして、すべて国のうちの有様、盗人など、よろづに c したためたまひて、御徳いと猛にてぞ上りたまひし。

その御北の方には、伊予守兼資のぬしの女なり。その御腹の女君二所おはせしは、三条院の御子の式部卿宮の北の方、いま一所は、傅殿の御子に宰相の中将兼経の君、この二所の御 B 婿をとりたてまつりたまひて、いみじういたはり聞こえたまふめり。政よくしたまふとて、筑紫人さながら従ひ申したりければ、例の大弐十人ばかりがほどにて、上りたまへりとこそ申ししか。

A かの国におはしまし [A] ほど、刀夷国の者にはかにこの国を討ち取らむとや思ひけむ、越え a 来たりけるに、筑紫には、d かねて用意もなく、大弐殿、弓矢の本末も知りたまはねば、いかがと思しけれど、大和心かしこくおはする人にて、筑後・肥前・肥後、九国の人をおこしたまふをばさることにて、府の内につかうまつる人をさへおしこりて、戦はせたまひければ、かやつが方の者ども、いと多く死にけるは。X さはいへど、家高くおはします故に、いみじかりしこと、平げたまへる殿ぞかし。公家、大臣・大納言にもなさせたまひぬべかりしかど、御まじらひ絶えにたれば、ただにはおはするにこそあめれ。この中に、むねと b 射返したる者ども記して、公家に奏せられたりしかば、皆、賞せさせたまひ [B]。種材は壱岐守になされ、その子は大宰監にこそなさせたまへり [C]。

この種材が族は、純友討ちたりし者の筋なり。この純友は、将門、同心に語らひて、おそろしきこと企てたる者なり。将門は、

「帝を討ちとりBたてまつらむ」と言ひ、純友は、「関白にならむ」と、同じく心をあはせて、「この世界に我と政をし、君となりてすぎむ」といふことを契りあひて、B一人は東国に軍をととのへ、一人は西国の海に、いくつともなく、大筏を数知らず集めて、筏の上に土をふせて、植木をおほし、よもやまの田をつくり、住みつきて、おほかたおぼろけの軍に、動ず2べうもなくなりゆくを、かしこうかまへて、討ちてたてまつりたるは、いみじきことなりな。それは、げに人のかしこきのみにはあらじ、王威のおはしまさむかぎりは、いかでかさることあるべきと思へど。

さて、壱岐・対馬の国の人を、いと多く刀夷国にとりて行きたりければ、新羅の帝、軍をおこしたまひて、皆討ち返したまてけり。さて使をつけて、たしかにこの島に送りたまへりければ、Cかの国の使には、大弐、金三百両とらせてかへさせたまひける。

このほどのことも、かくいみじうしたためたまへるに、入道殿、なほこのC帥殿を捨てぬものに思ひC聞こえさせたまへるなり。さればにや、世にもいとふり捨てがたきおぼえにてこそcおはすめれ。御門には、いつかは馬・車の三つ四つ絶ゆる時ある。また、道もさりあへず立つ折もあるぞかし。

この殿の御子の男君、ただ今の蔵人の少将良頼の君、また、右中弁経輔の君、また式部丞などにておはすめり。

（『大鏡』より。設問の都合で本文の一部を改変している。）

（注）○大弐……大宰府の次官。隆家は後に大宰府の権帥（長官）に任じられた。○闕……欠員。○三条院……三条天皇。○傅殿……春宮坊の職員、藤原道綱。○刀夷……刀伊（女真族）。○府の内……大宰府の中。○公家……朝廷。○新羅……高麗国。○入道殿……藤原道長。○御門……隆家邸の門前。

問一　傍線A～Cの漢字の読みをひらがなで答えよ。

問二　二重傍線部a～dの意味としてふさわしいものを、選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

a　ア　新しい　イ　はじめて　ウ　不誠実だ　エ　もったいない　オ　浅い

b　ア　騒ぎ立てる　イ　そしる　ウ　もとめる　エ　訴える　オ　評価する

c　ア　上奏する　イ　処理する　ウ　手なずける　エ　言いくるめる　オ　食事でもてなす

d　ア　前もって　イ　一緒に　ウ　田舎で　エ　連絡なく　オ　突然に

問三　空欄A～Cには、過去の助動詞「き」が入る。それぞれ活用させ、ふさわしい形にして入れよ。

問四　傍線部1「あ」、傍線部2「べう」の語の終止形をひらがなで答えよ。

問五　波線部A「かの国」、波線部B「一人」、波線部C「かの国」は、具体的に何を指すか。本文中から漢字二文字で抜き出せ。

問六　二重傍線部A～Cの敬語の種類と、誰から誰への敬意かを、それぞれ次の中から選び、記号で答えよ。なお、答えは重複してもかまわない。

【種類】a　尊敬語　b　謙譲語　c　丁寧語

【人物】ア　作者(語り手)　イ　読者(聞き手)　ウ　藤原隆家　エ　藤原道長　オ　三条天皇　カ　(日本の)帝　キ　新羅の帝　ク　種材が族　ケ　刀夷国の者　コ　将門　サ　純友

問七　傍線部a～cの動詞の、活用の行、活用の種類、活用形を答えよ。

問八　点線部「こころみにならばや」を、例にならって品詞分解し、文法的に説明せよ。用言は活用の種類と活用形を答え、動詞は上に加えて、活用の行も答えよ。

（例）　玉　／　ぞ　／　散　り　／　け　る

（文法的説明）　名詞　係助詞　動詞・ラ行四段・連用形　助動詞・過去・連体形

問九　二重傍線部X「さはいへど」の「さ」は、具体的に何を指しているのか。ふさわしい箇所を、本文中から十三字で抜き出せ。

問一〇　この文章で述べられていることにあてはまらないものを、次の選択肢の中からすべて選び、記号で答えよ。

ア　隆家は目の病気になったが、その原因は建具の格子戸の一部にぶつかったためである。

イ　刀夷国からの侵略に対して、隆家は戦い、見事に追い払ったが、隆家個人の昇進はなかった。

ウ　種材が壱岐守に昇進したのは、純友との戦いで活躍したためである。

エ　純友は筏の上に地面を作ったが、重くて沈んでしまい、戦いに敗れてしまった。

オ　隆家の子どもは、女の子と男の子で、それぞれ三人いる。

〔四〕 次の文章を読んであとの問いに答えよ。

恕字之旨、以如心為義。蓋曰如治己之心以治人、如愛己之心以愛人、而非苟然姑息之謂也。（中略）蓋能強於自治、至於有善而可以求人之善、無悪而可以非人之悪、然後推以及人、使之亦如我之所以自治而自治焉、則表端景正、源潔流清、而治己治人、無不尽其道矣。①所以終身力此、而無不可行之時也。

今乃不然、而直欲以其不肖之身為標準、視②吾治教所当及者、一以姑息待之、不相訓誥、不相禁戒、将使天下之人、皆如己之不肖而淪胥以陥焉、是乃大乱之道、而豈所謂終身

可レ行之恕哉。近世名卿之言有レ曰、「人雖レ至レ愚、責レ人則明。雖レ有レ聡明、恕レ己則昏。苟能以レ責レ人之心一責レ己、恕レ己之心一恕レ人、則不レ患レ不レ至レ於聖賢一矣。」此言近レ厚、世亦多レ称レ之者。但⑦恕字之義、本以如心而得。故可レ以施之於A一、而不レ可レ以施之於B一。今曰「恕レ己則昏一」、③則是已知レ其如レ此矣。而又曰「以レ恕レ己之心一恕レ人」、則是既不レ知レ自治其昏、而遂推以及レ人、④使レ其亦将レ如レ我之昏一而後已也。⑤乃欲レ由レ此以入レ聖賢之域、豈不レ誤哉。

（『大学或問』による）

（注）○設問の都合により、返り点・送りがなを省略している部分がある。　○旨……むね。意味。　○治……おさめる。ととのえる。　○苟然……その場しのぎのいい加減な態度。　○姑息……無原則に許すこと。大目に見ること。　○推……おし及ぼす。
○表端景正……おおもとの形が整っていればその影も正しくなる。　○源潔流清……水の源が清潔であれば流れも清くなる。
○不肖……愚かなこと。　○治教……教育を施して身を治めさせる。　○待……待遇する。人を取り扱う。　○訓誥……教え導く。
○禁戒……禁じ戒める。　○淪胥……一緒になって堕落し身を滅ぼす。　○陥……罪に陥れる。窮地に追い込む。　○大乱……世の中が大いに乱れること。　○近世名卿……北宋の范純仁（はんじゅんじん）のこと。　○至愚……この上なく愚かであること。　○昏……道理に暗いこと。暗愚なこと。　○近厚……篤実な発言に近いこと。　○称……たたえる。賞賛する。　○聖賢之域……聖人や賢者と同じ境地。

問一　二重傍線部a～cのよみを送りがなも含めてすべてひらがなで記せ。

問二　傍線部①を書き下し文にせよ。

問三　傍線部②を現代日本語で解釈せよ。

問四　波線部㋐・㋑は、同じ内容を述べている。㋐の返り点と送り仮名を参考にして、（甲）㋑を書き下し文にせよ。また、（乙）㋑を現代日本語で解釈せよ。

問五　空欄のⒶ・Ⓑに入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の(1)～(6)の中から選んで記号で答えよ。

(1)　彼・此　　(2)　人・己　　(3)　明・昏　　(4)　此・彼　　(5)　己・人　　(6)　昏・明

問六　傍線部③の解釈として最も適切なものを、次の(1)～(5)の中から選んで記号で答えよ。

(1)　自分は人を責めることができる人間であることがわかっているのである。
(2)　自分は人から施しが得られる人間であることがわかっているのである。
(3)　自分は聡明な人間であるということがわかっているのである。
(4)　自分は聖賢と同じ心を持つ人間であるということがわかっているのである。
(5)　自分は暗愚な心の人間であるということがわかっているのである。

問七　傍線部④の解釈として最も適切なものを、次の(1)～(5)の中から選んで記号で答えよ。

(1)　自分まで他人と同じような暗愚な人間にしてしまって、
(2)　その人を将来聖賢になれるような人間に変えようとして、
(3)　他人をも自分と同じような暗愚な人間にしてしまって、
(4)　他人すら自分と同じような聡明な人間に変えてしまって、
(5)　自分は他人とは全く異なる聡明な人物であると考えて、

問八　傍線部⑤を書き下し文にせよ。